



大震災からの学び～子どもたちの中にある力～



最近、石川県をはじめ日本各地で大きな地震が起きています。大きな地震が起きると思い出すことがあります。それは、28年前に起きた阪神淡路大震災の避難所での話です。震度7という激震で、亡くなった方は約6千人。ある学校では、8ヶ月間、避難所になりました。避難してきた人は約5千人。運ばれる遺体の安置場所もなく、くっついて寝たそうです。ベトナム、ペルー、韓国など外国の方も多くいました。

地震から数日、見えてきたのが差別。支援物資の情報を教えない人、同室の人を無視する人、外国人に出て行ってくれと言う人。寝たきりのお年寄りを見ないふりする人…。先生方は必死で訴えました。せつかく助かった者同士でそんなことをしてはいけない、避難所の運営を助けてほしいと。すると、子どもたちが、立ち上がりました。外国人やお年寄りに「おばちゃん、どうや」「おじいちゃん、痛くないか」と中学生が声をかけ、小学生が真似をして、避難所に声かけ運動が広がりました。震災で全てを失い、希望のない大人に、子どもたちが清々しい命を吹き込んでいきました。

1日に1つの弁当を3人で食べる日が続き、先生が苦勞して弁当を配っていると、小中学生が「私たちが計算して配る」と申し出て、お年寄りや外国人など弱い立場の人にも平等に分けました。1人のおばあさんが「私はずっと食べていないので、1つください」と言ってきたとき、子どもたちは「分けてもらえなかったんや。かわいそうだ。」と悩みますが、「お弁当は1人1つもないから、1つあげると食べられない人が出る。おばあちゃん、この人たちと3人で食べてね」と近くの人のに連れて行って渡しました。

普通の生活でも、生きるか死ぬかの災害時も、避難所でも、差別意識は人間の「性」で、何かのきっかけに顔を出します。ですから、それは「本当に正しいことなのか」と自分に問い続けていく必要があります。

28年前の大震災のとき、正しい行為を形にしてくれたのが、子どもたちだったということです。皆さんの中にも、そういう素晴らしい力があるのです。